

## 専門教育を基礎として教養を学ぶ

大学教育開発研究センター長 濱口 哲

人として教養を持つが大事であることを否定する人は誰もいないが、反面、教養とは何かを簡潔に言い表すことができる人も少ない。したがって、大事にすべき教養の中身について十分な合意は無く、漠然とした了解のもとで議論されていることが多い。百人寄れば百の教養がある。大学の教育目標には、専門教育と並んで教養教育の充実が常に掲げられる。しかし、教養教育に関わる目標を抽象的一般目標として掲げることはできても、検証可能な行動目標にすることははなはだ困難である。世間で言う「教養」は、社会人として全人格的観点から考えられるものであることは言うまでもないが、その養成のどの部分を大学が担うのかを、大学は改めて具体的に考えなくてはならない。

昔、大学がほんの一握りの人のものだった時、そして、知識人と呼ばれる人の多くが大学に関わっていた時代、大学は紛れもなく学術の中心であったし、そこで行われる活動の総体が世間の教養であったかもしれない。その状況では、改めて「教養」と言挙<sup>ことあげ</sup>する必要はなく、大学の存在そのものが教養の象徴であったに違いない。

大学が学術の集積拠点としての意味を持つことに変わりはないが、現在、学術を担う大学以外の社会装置はたくさん存在する。大学だけが学術の最先端ではないし、多くの「学識経験者」は大学の外にいる時代なのである。したがって、大学における教育も、大学内に自然に集積した学術を見せるだけでは済まない。社会全体に集積されている学術を学び、体系化し、取捨選択して学生に提示しなければならないのである。

大学に同世代人口の半数が通う時代が到来した。また、えり好みしなければ、どこかの大学には入学できる時代になった。個々の大学は個性的な教育目標を掲げて教育を行うことが要請される。そうでなくては学生はどのようにして大学を選んだらいいのか分からない。個々の大学が個性的な教育目標を掲げるとしたら、「大学で養う教養」も大学毎に異なる概念のものとなるはずである。そのように考えると、平成のはじめまで日本のすべての大学で一律に行われてきた教養課程が廃止されたことには十分な根拠があるし、それにもかかわらず、大学で教養教育を行うことを社会が期待するのをもまた当然のことと言える。

大学教育の中で教養教育に対置されがちな専門教育を考えてみよう。専門教育は特定の学問分野について学ぶものとされ、教養教育より一見分かりやすい。教養の定義が定まらず、教養教育が常に疑義をもたれ、変革を要求され続けてきたのに比べると、専門の定義は一見明確で、専門教育は不動の価値と内容をもって存在してきたように見える。しかし、大学における教養の変化を求めた社会的状況は、当然の事ながら専門教育にも変化を要求する。

学部専門教育は、分野という山野の中に拓かれた道を歩きながら、諸処の研究の最先端を覗く、そうしたガイドツアーのようなものである。学生がガイド無しで野山を歩くことができるようになるのが教育目標となる。しかし、今日、以下の二つの要因からガイドツアーの場として大学が適当な場なのかが問われているような気がする。

一つは、拓かれた道が長くなりすぎて、四年間で要所を回ることにすら困難になりつつあることである。分野全体の広さが拡大したわけではないので、道を整理すればガイドツアーは十分可能なはずであるが、開拓のスピードに

整理が追いついていない。「教科書」作りや「授業」作りが整理作業であるが、そこに知的エネルギーが十分に投入されていないことと、道の長さや複雑さ、さらに自己定位の困難さが、その作業を日々困難にしている。四年間で見て歩けるのは、その長い道のりの入り口付近だけになりつつある。したがって、専門教育の教育目標は専門分野そのものに依存できなくなりつつある。例えば、理学部生物学科の目標は単純に「生物学の専門家を養成する」ということではもはや済まない状況になっている。生物学を標榜する教育プログラムとして自立した教育目標を掲げなければならない。

もう一つの要因は研究現場の存在そのものに関わることである。研究、とりわけ基礎研究は、昔は大学の専売特許だったかもしれないが、今日、その作業は社会の各所で行われている。むしろ、大学でその作業を本格的に行うことにはさまざまな困難があり、大半は大学外で行われていると言っても良い。結果として、大学の専門教育は高速道路に依存した観光旅行に似てくる。そうすると、研究の現場はなかなか見えないし、現場を覗かなければ、学問の醍醐味は感じられないのである。

もう一度教養の問題に戻ろう。平成三年まで、大学は教養教育と専門教育の二本立ての教育を提供していた。平成三年に、両者を有機的に結びつけた一貫教育を行うことになった背景には上記のような教養と専門の変化があり、それはある種の必然と言える。しかし、そもそも教養とは何かが不明確で、教養と専門の有機的関係が明らかでない中で、学生は道しるべなしに彷徨することを強いられている。道しるべを作るために、教養と専門の有機的関係を取り結ぶ鍵を捜さねばならない。

専門教育から教養を考える時、教養の機能として明確なことの一つは、その“GPS機能”かもしれない。私は、メダカという小魚を使って、雌雄性の研究をしている。その研究の重要性を主張するためには、メダカを使った性研究の生殖生物学全体の中での位置づけを問わねばならない。生殖生物学は生物学全体の中でどのように位置づけられるのか、生物学は自然科学の中で、さらに、人間の知の体系の中で……。問いかけは無限に続くのである。その問いかけを支えるものが教養なのだと思う。この点に関して、人は欲張りでなければならない。できるだけ広い知の体系の中に自らを位置づけようという欲を持つ必要がある。そのためには、広くて厚みのある教養が必要である。人は自らの教養が及ぶ範囲を越えて、位置づけはできないのである。

その様に考えると、教養の必要性は専門教育に由来することになる。位置づけを求めるべき中核がなければ、位置情報は殆ど無意味である。何を探すわけでもなく漫然と地図を見ることは困難である。確かに地図を見ることを楽しみとしている人はいるが、その場合でも瞬間瞬間に自らの定位を求めながら、地図上をヴァーチャルな旅をしていることが多い。専門から位置づけが求められる時、真の教養が問われる。そしてその求める声に答えることにより、教養が拡大するのである。拡大した教養が専門からの問いかけに答える時、専門分野の理解はより強固なものになる。従来、教養教育は専門教育の基礎、あるいは周辺に位置づけられるものであった。しかし、教養が人の知的生活の総体であるとしたら、最も重要な教養教育は専門教育であり、専門を極めた果てに教養があるというのは言い過ぎだろうか。

今日の若者は、他の学問を捨てていった結果、残ったものを学部で学ぶ専門に見えなくもない。消去法で専門分野を得た若者に対して、専門を学ぶことを通じて教養に至る道を提供することが、“高等教育”の重要な使命であるように思える。